虐めの果てに殺人に至った少年の心理の詩的描写と考察

シー様（借りの返せない男）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
虐めの果てに殺人に至った少年の心理の詩的描写と考察

【Ｎコード】
Ｎ２７９６Ｐ

【作者名】
シー様（借りの返せない男）

【あらすじ】
虐めの果てに殺人に至った少年の心理の詩的描写と考察

ーーーーーーーーーーーーー
集団いじめより幼児が怪我を負わされた実際の事件をモデルにして
殺人まで発展したと場合と想定する
ーーーーーーーーーーーーーー

僕は、人を殺したのか？。
僕じゃない！僕のせいじゃない！
こんなはずじゃなかった。

死んだのは、８歳の小学生だ。
僕は、友達といっしょになって、この子をいじめた。
理由は特に無かった、楽しいと思ったから・・・

この子は、偶然、たまたま、友達の一人の怒りを買った。
その友達は、僕より１つ年上で先輩である。世間的には、いわゆる不良と言われている。。
けど、彼は頼もしい。万引きが上手い。僕が欲しいものを万引きしてくれる。
僕が苛められそうになったら、僕を守ってくれる
そんな部分を僕は尊敬していた。

けれど彼は、弱い奴を苛めるのが大好きな奴だった。
僕も少し怖い。あんまり逆らうと、僕にさえ手を上げることがある、
でも、それは、常識の範囲内と思っている。

彼は、その小学生の子に、馬鹿にされたことを理由に、その子を苛めた。

彼なら、そうすると思った。いつものことだし何も考えなかった。
僕達は、いじめた。楽しかった。
けど、その子は怪我をしてしまった。
いじめた証拠が残ってしまった。

僕は、怖くなった。
もう直ぐ受験を控えた身だった。
こんなことが、もし、学校にバレたりしたら、内申書に響く。
あれだけ沢山勉強して、塾まで通ったのがおじゃんになってしまう。
親に怒られる。怖い。顔向けできない。
どうやって言い訳をしたらいいんだ？
僕は、独り言をしゃべっていた。

それを聞いていた彼は、言った
「じゃあ、もっと、いじめて、人にしゃべる気を無くさせよう」
その通りかもしれない。ちょっと可愛そうだけど、恐怖を覚えさせれば良いことだ。
怪我をさせないように、苛めるには、どうすればよいのか？
僕達は、それを考えながら、いじめた。

そこへ、偶然m小学生の子供達が通りかかった・・・
彼は、「この子のをいじめないと、お前達もいじめるぞ～～～と、」
笑いながら言った。
小学生たちも参加して一緒にいじめた。

彼は、その子を海に皆で落すことを提案してきた。
僕もいい提案だと思った。水なら怪我はしないだろう。
僕達は遊びのつもりだった。
テレビでよくやるギャグ番組みたいなノリだった。
だけど、その子は泳げなかった。

どんどんどん沈んでいった。
僕は、やばいと思って飛び込んで助けた。
だけど、その子の呼吸は止まっていた。
僕はパニックになった。どうしていいか判らなくなった。

こんなところ誰かに見られたら、全部失う。
今まで努力して築づいてきたものを失う。
失う。親も友達も学校も全ての信頼を失う。
こわいこわいこわい。
僕は、恐怖のあまり逃げ出した。

数日後、僕は殺人容疑で逮捕された。
僕は動機を聞かれて、こんな風に答えた「いじめが楽しかった。」
「怪我させたのがバレたくなかった」「だからもっと、いじめた。」
僕は、それで自分の気持ちを全てを表現したと思った。
皆、わかってくれるかな？

僕達のことは、新聞やニュースになった。
そこには、僕達が警察に話したことが書いてあった。
動機は「暴行が発覚することを恐れたから」「馬鹿にされて腹がったたから」
僕がこの記事を読んだ時、こんなことが理由なんだっけ？て感じだった。
頭の中に「？？」が一杯浮かんでいた。

＜考察＞
この少年の感情描写は少年にっとって、深層心理にあるものであり、
だからこそ少年は自分の本当に気持ちを自覚できない。
そこまで真理を求めて理屈で泳ぎきるのは子供には不可能。

だから、あえて、その心理を以下として書き出した。

こんなところ誰かに見られたら、全部失う。
今まで努力して築づいてきたものを失う。
失う。親も友達も学校も全ての信頼を失う。
こわいこわいこわい。
僕は、恐怖のあまり逃げ出した。

だが上記について報道で表現される事はまずない。
なぜなら加害者を擁護すれば、モラル的に誰かのバッシングを浴びてしまい、余計な仕事が増えるからである。
その上、センセーショナルでなければ視聴率は稼げないので、おまんま食えない。。
つまり、恐れているのだ。

でも、それは自己保身という精神であり加害者である少年と同じ思考フローに居る。
少年と同じなのに、それなのに少年を悪として認定するのは恥ずべき行為なのではなかろうか。

少年を悪と認定するなという訳では無いが、世の中が少年悪と認定する限り、
下記の様な少年が感じた理由について、ないがしろにされる。

こんなところ誰かに見られたら、全部失う。
今まで努力して築づいてきたものを失う。
失う。親も友達も学校も全ての信頼を失う。
こわいこわいこわい。
僕は、恐怖のあまり逃げ出した。

これらの感情に至る理由と原因を摘み取っていかなければ、同じことは繰り返されるだけである。
報道が自分の生活の為に生きたいと願い、敵を作りたくない気持ちは判らなくは無い。
けれども、敵と戦ってる限り味方が現れる筈だと俺は思う。
だから頑張れと言いたい。　世の中を導いてくれと言いたい。
全ての報道が、頑張って無いとは断言できないが、一人でも怠けてると、頑張ってる奴まで怠けている様に思われてしまう。

全ての虐めでの殺人が、この少年の事例に当て嵌るとは言えないが、結構、当てはまってんじゃないかと思う今日この頃である・・・

（後書き）

「僕は殺すつもりは無かった！　助けたんだ！　だから判ってクレオ」という感情描写が抜けて、理屈が歯抜けとなってると書き終わった後に気づいた。

本文にある事は、なんら辻褄が合わないのである。

今更だが恥ずかしくて潰れそうだw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2796p/

虐めの果てに殺人に至った少年の心理の詩的描写と考察

2010年12月3日22時20分発行